



六
花
8

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

秋草に風まぎれるる享子の忌

八月三日辻享子(たかこ)

端居して団扇の風をもらふ猫

そろばんを日課に風の三尺寝

涼風や一筆箋をまた探し

杓立てて洗ひをりたる青田風

梅雨明けの風に敦盛蕎麦すする

まとひつく蚊は前世のたれの声

岩おこし供へありたる風の滝

ハンカチに燕模様の風が吹く

白南風を繰り出してくる淡路島

頂は風に崩れし雲の峰

風騒ぎるたる浮巢の逢瀬かな

山田六甲

顔昼洪

道



浜昼顔どちらともなく靴を脱ぎ
滝風に喉の渴きの去りにけり
弁慶の硯欠けある蝉の風
細滝は風の尻尾となりにけり
青田かな鷺の冠吹かれるて
法要の膝くづしあふ青田風
真赤なる西瓜太郎の生まれけり
蝉のしと輝き免許更新日
桃の皮するりと香りたちにけり
七夕や子ども土俵へ海の風
大書かな咖喱の缶を煮込みるて
ハンカチの目にも涼しきつばめの絵

藤咲くやうつろに母の薄化粧
蛙鳴く母亡き部屋の薄明り
ぼうたんに虫の来たりて匂ひ立つ
静けさの崩れ落ちたる白牡丹
桐の花延命のこと聞かれをり
無造作に畦に積まれし葱坊主
つばくろの水面打ちたる音さだか
海風の冷たさに夏めけるかな
大棚に揺るる藤房触れ合はず
藤の花旅に見上げし夫は亡く

高華抄

朱夏の沖

佐津のぼる

はつなつの風に棕櫚鳴る入江かな
航く船も曳く水脈も白朱夏の沖
口笛に犬の駆けくる野の五月
鯉のぼりうろこの落ちるかによぢれ
脱ぎきれず幹にのけぞる竹の皮
夏わらび長け一村の墓どころ
水不足なれど玉苗根付きけり
風薫るどこへも遠出叶はねど
売り物にならぬ胡瓜をもらひけり
妃殿下のお皿のやうな夏帽子

初めての駅はまぶしく花水木

善野 行

初めての駅はまぶしく花水木

武蔵野の面影ありぬ新樹光

春落葉妻の実家の墓を掃く

菜の花をわけゆく川の風まぶし

暖かや上野の森の陽と風と

はじめてのえきはまぶしくはなみずき ぜんこのころ

「まぶしく」が初々しい。

まぶしいというのは、期待と不安の入りまじった眼と意識の衝突で起こった火花なのだろう。その視覚的なまぶしさが花水木の白さでスイングバイしたにちがない。かつての武蔵野の雰囲気は今も残っている妻の実家を訪ね駅を降りた瞬間のまぶしい気持ち在上の五句と相俟って伝わってくる。国木田独歩「郊外」の主人公、教員（善野行も教員）に作者自身を重ねてあるのかもしれない。行は最近著しい進歩を見せてくれる。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

升田ヤス子

鐘ついて我も言祝ぐ仏生会

紙コップにただく甘茶花祭

釈尊にまみゆる心地甘茶掛け

しとど濡れたまふ仏にまた甘茶

花祭鳥も言祝ぎ鳴きにけり

線香の匂ひの中の桜かな

行き止まりの道や桜の咲いてをり

城跡を指す日時計や花曇

廃屋や跡取が花仰ぎゐて

葛芽吹き風の行方を探りけり

通知簿と臍の緒見るやあたたかく

花ひとひら縮緬小裂ひさぐ店

お徒士町跡の地獄の釜の蓋

かるがもの濠の花屑割り進む

黒蝶の火山弾とも見ゆる日よ

異国語と思ふ花苑の落し文

永田万年青

色鯉の沼の顔して回遊す

かしましく卯波の汀貝現るる

隠沼や藤の花屑漂へり

松の芯池は生氣を取り戻し

松の芯枝を支ふる水の上

堰の音昂ぶつてゐる緑雨かな

新緑の広き園内一巡り

五月尽天地の動き激しかり

藤生不二男

つばくらや納屋に古りたる農日誌

時頼のゆかりの寺や桐の花

睡蓮や映れる空の澄みに澄み

潮入りの川の逆波夏に入る

白鷺の吹きもどさるる青嵐

青鷺のさざ波にゆれ風に揺れ

さざなみの青草原となりにけり

ひとすぢの萍分かつ流れあり

出口 誠

大岩を割りし大樹の若葉かな

切り株のすそ野の木なる若葉かな

切り株のすそ野に生えし若葉かな

ひこばえの若葉に力感じけり

母の日の息子が飯をたきにけり

母の日の息子がそうじしてをりぬ

大夕焼飛行機雲が羽根になる

昼寝かないびきマスクを鼻にして



雪樹集

谷口 一献

品書きの読めぬ漢字も夏懐石
先人の技なる新酒火入れかな
冷酒や女は無口な方がいい
一夜酒酔はない筈が酔うてをり
紫陽花の紫四隅より来たる
蓮を観に厭うてならぬ雨催ひ

住田千代子

浮く花に濠の広さを知らさるる
空井戸の底にまでさへ花明り
伸ばす手に通草の花を絡ませり
虎杖を手折りし指を拭ひけり
晴天をぼやかしてゐる山の藤
ほつほつと散れど濃かりき藤の花

平居 滯子

樹々は皆白き花つけ夏に入る
万緑の近江富士より夫の故郷
藪山を艶めかせたる藤の花
初蝶や鎮守の森へ少年消ゆ
赤鳥居小さき代田残しけり
花馬酔木「茶粥」の木札かけてあり

廣畑 育子

大足に踏まれさうなるきらん草
垣中の猫目草に目を凝らす
花通草濠へ傾げるばかりなる
川端の軽鴨の子の洞に鳴く
軽鴨の子の川の字に水脈曳けり
浜風に混じりて匂ふ栗の花

六^り花^っ集^{かし}
集^{ゅう}



善野 行

初めての駅はまぶしく花水木
武蔵野の面影ありぬ新樹光
春落葉妻の実家の墓を掃く
菜の花をわけゆく川の風まぶし
暖かや上野の森の陽と風と

小林はじめ

戯れ童日照雨に追はれ惑ひけり
茅葺きの景を訪ねて軒菖蒲
山肌を俺が天下と朴の花
坪庭に静らな飾の花八手
初夏の宙一等綺麗青い星

螢雪譚 山田六甲



8月作品から

一夜酒酔はない筈が酔うてをり

谷口 一献

一夜酒とは甘酒で夏の季語だが、一夜とは「一夜かぎりの」という意味深なおことも連想を

誘う。甘酒は夏の暑気払いの飲み物だった。アルコール発酵ま

でとにかく、糖分が出たところ

でとめる。その辺は熟知した一

献。甘酒で酔うはずはないのに、

なぜか酔った感じがするのはどうしたのだと、酔った自分が

信じられないのである。もしかしたら、自ら造ったのでなく、

甘酒ですよ、と差し出してくれたものかも知れぬ。その人は酒

粕利用して甘酒と称したのかも

しれぬ。主宰も昔城之崎の日和山公園で、休憩した時、甘酒を注文して出てきたのが酒粕を薄めて甘みを付けたものだった。飲んでしまつてその日は宵まで酔いがさめるのを待った。

虎杖を手折りし指を拭ひけり

住田千代子

簡潔な表現がいい。水分の多い虎杖を折ると、手が濡れる。

虎杖の汁を何かでぬぐっている

のである。虎杖は野に遊んだり

トレッキングなどの途中で折り

採つて、噛むと酸っぱい水分が

のどを潤す。ヒトは大人になると酸味が弱くなる。だから舐め

ずに拭いたのだらう、などと句を鑑賞できる。俳句に簡潔さは必要である。こういう過不足のない詠みぶりがいい。

万緑の近江富士より夫の故郷

平居 澤子

主宰はご主人の故郷(さと)と臆げに聞いているがはつきりとは知らない。滋賀県の湖東で

長浜近くという。近江富士は好

きな山で湖東の長浜や湖北余呉

湖と何度も訪ねている。この間

も万緑の中金沢へ向けてバスで

通過した。水田に緑美しい近江

富士が映つて最高だった。その

近くでご主人は生まれたのであ

らう。